明治大正新語俗語辞典

新装版

樺島忠夫
飛田良文
米川明彦
——【編】

しゃしんけっこん
ステンショ
ヌーボーしき
パノラマ
ぶんかせいかつ
リードル
かんじょういにゅう
づかとう
ハヤシライス
しゃせいぶん
しののめのストライキ
クライマックス
おだをあげる
デマ
ハズ
りんかんがっこう
セクト
サボる
キセルのり
かつべん
おんじょうしゅぎ
インテリゲンチャ
いんせん
あかバイ
べんりや
フラフ

せいたいもしゃ
どうするれん
モガ
えびちゃしきぶ
いっとうこく
あたらしいおんな
へんたいせいよく
ふりょうしょうねん
ビタミン
はなでんき
ばんから
ソーダすい
じゅう
グロ
かんたんふく
オッペケペ
オーライ
えきでんきょうそう
ウナでん
だいげんにん
モダン
セコハン
からたち
えんたろうばしゃ
イルミネーション
はんドン

東京堂出版

明治大正新語俗語辞典

樺島忠夫
飛田良文
米川明彦
——編

江苏工业学院图书馆
藏书章

しゃしんけっこん
ステッショ
ヌーボーしき
パノラマ
ぶんかせいかつ
リードル
かんじょういにゅう
づかとう
ハヤシライス
しゃせいぶん
しののめのストライキ
クライマックス
おだをあげる
デマ
ハズ
りんかんがっこう
セクト
サボる
キセルのり
かつべん
おんじょうしゅぎ
インテリゲンチャ
いんせん
あかバイ
べんりや
フラフ

せ[illegible]もしゃ
どうするねん
モガ
えびちゃしきぶ
いっとうこく
あたらしいおんな
へんたいせいよく
ふりょうしょうねん
ビタミン
はなでんき
ばんから
ソーダすい
じゆう
ダロ
かんたんふく
オッペケペ
オーライ
えきでんきょうそう
ウナでん
たいげんにん
モダン
セコハン
からたち
えんたろうばしゃ
イルミネーション
はんドン

東京堂出版

編者略歴

樺島忠夫（かばしまただお）
昭和二年生、京都大学卒。神戸学院大学教授。国語学。編著書に「日本の文字」「日本語はどう変わるか」「文章構成法」「文章作法事典」「作文指導事典」など。
現住所―枚方市山之上西町14―25

飛田良文（ひだよしふみ）
昭和八年生、東北大学大学院修了。国際基督教大学教授。国語学。編著書に「東京語成立史の研究」「英米外来語の世界」「日本語中国語意味対照辞典」「現代形容詞用法辞典」「現代副詞用法辞典」「明治のことば辞典」「日本語の歴史」など。
現住所―武蔵野市吉祥寺東町3―23―16

米川明彦（よねかわあきひこ）
昭和三〇年生、大阪大学大学院修了。学術博士。梅花女子大学助教授。国語学。編著書に「手話言語の記述的研究」「新語と流行語」「女子大生からみた老人語辞典」「すきやねん若者語辞典」など。
現住所―茨木市大池2―28―5

明治大正 新語俗語辞典 新装版

平成八年九月一〇日 初版印刷
平成八年九月二〇日 初版発行

編者 樺島忠夫 飛田良文 米川明彦
発行者 大橋信夫
印刷所 有限会社 三春印刷
製本所 渡辺製本株式会社

発行所 株式会社 東京堂出版
東京都千代田区神田錦町三ノ七（〒101）
電話 〇三―三二三三―三七四一 振替 〇〇一三〇―七―二七〇

ISBN4-490-10432-4 C1581
Printed in Japan

Tadao Kabashima
© Yoshifumi Hida 1984
Akihiko Yonekawa

まえがき

現代日本語の語彙を収めた辞書には、大きく分けて二種類あるように思われる。一つは生命が長い辞書、他は生命が短い辞書である。生命が長い辞書というのは、現代日本語の語彙を総合的に捉え数万の見出し語を編集した辞書で、学習に使われたり机上に置いて文章を書くにあたって参照されたりする国語辞典である。これに対して、生命が短く、出版されてから時日がたつと故紙として売られたり焼き捨てられたりする辞書もある。新語辞典、モダン語辞典の類で、国語辞典が上質の紙を使うのに対して、これらには雑誌と同じ紙質で装丁も簡単なものが多い。いわば雑誌扱いの書物である。

これらの書物が記録してきた、それぞれの時期の新語・モダン語には、漢語もあり外来語もある。これらの中には、すぐに使われなくなって消え失せるものもあるが、生き残って定着し、生命が長い辞書の中に収まってしまい古くからの語と見分けが着かなくなるものもある。こうなると、その語の歴史は分からなくなってしまう。

日本は、幕末・明治期から文明・文化の上で大きく変化した。日本人は新しい文物を進んで採り入れ、新しい生活に適応してきた。このことは、日本語の語彙にも大きな影響を与えた。文章・談話の基本を形作る語は、昔ながらの和語であり古い歴史を持つ少数の漢語ではあるが、新しい文物を摂取するために、多くの新しい漢語が作り出され、様々な外来語が採り入れられてきた。現代日本語語彙

の、概念として重要な部分の多くの部分はこれらによって占められている。その時々の新語・モダン語・俗語を消滅させずに記録しておくことは、日本語語彙の成立・あり方を考える上でも、また明治以後の世相を捉える上でも必要なことである。変化の激しかった明治以後百年余の語彙的状況は、今これを記録しておかなければ急速に失われて分からなくなるだろう。こういうわけで、この辞典を作ることを考えた。

ある時代の語の用法やニュアンスを知るには、その当時の辞書を参照するのがもっともよい方法である。そこで、この辞典においても、その時々の新語辞典・モダン語辞典の記述を再録するのがよいと考えられる場合にはそのようにした。またその当時に文士や著名人が述べたり漏らしたりした回想をあげて、明治・大正・昭和の世相をできるだけ再現できるようにした。

一般の一冊本の国語辞典においては、それが大きければ大きいほど、編集にあたって、一つ一つの見出し語の用例を追跡して、できるだけ初出に近い例を求めて掲示することは編集上の制約によって困難になる。またその語の用法を時の経過を追いながら掲示することは紙幅の関係で省かれるのが普通である。この辞典では、大辞典が洩らしている語の初出例をできるだけ求めるようにした。また必要に応じて時の推移による用法の変化が再現できるように用例を時代を追って掲げた。

その時代の人間が、後の世の人のためにして置かなければならないことにはいろいろあるが、特に言語に関心がある者がすべきことの一つは、その人が生きた時代、手がまだ届く時代の言語のあり方

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

を、後世の人によく分かるように記録しておくことであろう。われわれ編者は、この書を、今後の語史、近代日本文化の原点を研究する出発点、拠所を設定するものと考えている。

なお、最後に、用例の確認にあたってお手伝いいただいた白井康浩、小林いづみの両氏、および本書の出版にあたってお世話になった東京堂出版の西哲生、松林孝至、武藤恭裕の三氏に感謝の意を表する。

昭和五九年三月一日

樺島忠夫
飛田良文
米川明彦

凡例

一、本書は主に明治元年から昭和二〇年までの間に誕生した新語・俗語八〇〇語を対象とした。

一、新語は公の場で使用される新造語・借用語・転用語をいい、俗語は私の場で用いられる新語をいう。詳細は付録1「新語俗語の造語法」を参照されたい。

一、見出し語の配列は五十音順である。

一、各見出し語には、見出し・漢字表記・語源・語義・用例・参考の項をもうけ、次のように記した。

(1) 見出しは和語・漢語を平仮名、外来語を片仮名で表記した。ただし擬声語、擬態語など片仮名で表記したものもある。

(2) 漢字表記は新字体による。

(3) 語源は『　』に入れて示した。外国語からの借用語には、英・独・仏・蘭など国名を示した。

(4) 語義は簡潔に記すことにし、その用法や語感・イメージなどは用例および参考の文章から理解できるように留意した。また、「日本から中国に渡った語」とした語は、さねとうけいしゅう「中国語のなかの日本語」(『言語生活』一八一・一八二号、昭和四二年)による。

(5) 用例は用例ごとに作者・作品名・章名・刊行年(発表年)を記し、原典にもどることができるように配慮した。また、その語の用法・語感などがわかるように、許される範囲で長く引用した。さらに、明治前期・後期・大正期・昭和前期と各期の文献から引用することに努め、語史もわかるようにした。用例の表記は、底本に従った。底本は原本か原本通りの表記の全集を使用することに努めたが、底本が現代仮名づかいの場はそれに従った。振り仮名は必要最少限にかぎった。底本は付録4「用例引用文献一覧」参照。作品名の／は角書きの二行割書きを示す。

(6) 参考は本書の対象外である昭和後期(太平洋戦争終了後)の文献の中で、過去を回顧した文章その他で、新語俗語の語源や語感の参考になるものを紹介した。

目次

まえがき
凡例
明治大正 新語俗語辞典……三
付録
1 新語俗語の造語法……三四一
2 新語辞典目録……三四九
3 引用参照文献一覧……三五五
4 用例引用文献一覧……三六六

明治大正 新語俗語辞典

あ

アークとう 【アーク燈】『英 arc-lamp の訳語』 二本の炭素棒を電極として電流を通じ、その間に生ずる弓形の放電によって光を出す電燈。アークとは弓形、弧の意。そこで、弧光燈または弧燈ともいう。白熱の強烈な光を放ち、薄い紫色を呈する。明治一一年三月二五日東京電信中央局開業式に初めて点火。公園・街路・停車場・活動写真館などで用いられた。

◇塚原渋柿園『おあき』第三回（明治二八）停車場の構内と青山練兵場の西の端に相対して鉄道を挟める三基の弧光燈は、此の漠々たる凝れる雲に光耀を映して

◇夏目漱石『三四郎』九（明治四一）此円盤の面へ弧光燈の光を直角にあてると、此円盤が光に圧されて動く。

◇素木しづ『松葉杖をつく女』（大正二）病院の門口にアーク燈が白衣の人の面影の様にぼうとついて俥は矢の様に赤い煉瓦塀をめぐる。

◇宮本百合子『伸子』五・五（昭和三）夜はアーク燈の光で、ぞろぞろ通る人間も、お濠の松の枝ぶりも、いつもと違ふやうに見えた。

◇尾崎士郎『人生劇場　青春篇』花道（昭和八）アーク燈の光の中で二人の青年の眼が感激にふるへてゐる。

アイス 『英 ice』 高利貸のこと。アイスクリーム（ice-cream）の訳語「氷菓子」が「高利貸」と音が通ずるところから、高利貸のことをしゃれてアイスクリームと呼び、さらにアイスと略した。

◇久田鬼石・吉田於兎作詞・曲「やっつけろ節」（明治二二）でれたお客と見てとれば　得意の手管で丸め込み　ぽっぽのお金を吸い取って　ひいきの俳優につぎ込んで　それでも足らずに高利借り　アイスクリームにせめられて首も回らず青くなる　これが芸者の本分か　そんなやからは吾々が　自由の鉄拳で　ヤッツケロー

◇尾崎紅葉『金色夜叉』中編・第一章（明治三二）此奴が、君、我々の一世紀前に鳴した高利貸で、赤樫権三郎と云つては、いや無法な強慾で、加ふるに大々的姪物と来て居るのだ。

◇小杉天外『初すがた』（明治三三）「彼が君、斧岡つて評判の高利貸なんだよ。」と笠田は切りと双眼鏡を視詰めて、

◇徳冨蘆花『不如帰』上編・六の一（明治三三）実は其の気焔の一半は、昨夜宅にて散々に高利貸を喫玉ひし鬱憤と聞いて知れば、難有味も半ば減ずる訳なり。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

◇内田魯庵『社会百面相』代議士・下（明治三五）不思議ですナ、矢張高利貸に御関係あるといふは？
◇中里介山『大菩薩峠』みちりやの巻・八（大正二）実家が高利貸でもしていて「わたしの家はアイスクリームよ」とでもいおうものなら、

アイスクリーム　『英 ice cream』　牛乳に卵の黄味と砂糖をいれてまぜ、こおらせたクリーム状の菓子。なまってアイスクリンともいう。日本で最初に発売したのは横浜馬車通りの常盤町に氷水店を開いた町田房造で、明治二年五月九日のことであった。
◇饗庭篁村『むら竹』人の噂（明治二二）錦の帳の中に侍づかれて氷菓子を末期の水にしても満足の出来ぬは死なり
◇内田魯庵『社会百面相』新妻君・上（明治三五）去年の夏、良人と一緒に、阿姑さんを伴れて風月堂へ氷菓子を喰べに行ったんですよ。すると老人てものは仕様がないもんで平生喰べつけないから余り美味がらないンですよ。
◇石坂洋次郎『若い人』上・二〇（昭和八～一二）買い物をすませて、食堂でアイスクリームを食べながら、間崎は、さっき休憩室で目撃した不快な出来事を少し尾鰭をつけて細かに報告した。
◇太宰治『正義と微笑』七月五日（昭和一七）夜、木島さんとおシュン婆さんと僕と三人がかりで、変なアイスクリイムを作って食べてゐたら、ベルが鳴って、出てみると、木村のお父さんが、のっそり玄関先に立ってゐた。
［参考］◇サトウハチロー『僕の東京地図』僕の旧東京地図（昭和二一）夏がくる、アイスクリンの（アイスクリームなんてねばツこいものぢやない）旗は、機械をまはしてゐるオヤヂと共に、汗とほこりにまみれ、
◇池田弥三郎『銀座十二章』六の章（昭和四〇）資生堂のアイスクリームは、鍋町の風月堂のアイスクリームとともに（中略）文字通りアイスクリームであって、ほかの店のは、ものによると氷のかけらなどがコツンと歯にあたるアイスクリンであった。
◇茂出木心護『洋食や』アイスクリン（昭和四八）竹の長いへらで筒の中をかきまぜ、黄色と赤の色つけ水を作り、アイスクリンの上にかけてくれます。私が買いにいくと、もなかの皮で出来た円錐型の入れものにアイスクリンを切りたつように盛ってくれます。
◇古川緑波『ロッパの悲食記』氷屋ぞめき（昭和五八）映画館の中売りが売って歩いたのは、正にその黄色で、牛乳も何も入っていない、名前も、アイスクリンだった。

アイディア　『英 idea』　哲学用語では観念・理想、文学用語では発想・着想・構想など。
◇北村透谷『内部生命論』（明治二六）然れども爰に一言

せざるべからざることは、文芸の上にて言ふところのアイデアなる者は、形而上学に於て言ふところのアイデアとは、名を同うして物を異にする者なること之なり。

◇里見弴『多情仏心』前篇・不良の徒・三（大正一一～一二）もしその言葉から、彼女に現はれる表情を待ち、そしてそこに何等かの思考（アイデイヤ）を得ようとしてゐたものとすれば、三好も存外気が弱いと云はなければならない。

◇梶井基次郎『檸檬』（大正一四）不意に第二のアイデイアが起った。

◇寺田寅彦「映画雑感Ⅳ」五（昭和一〇）日本には西洋とちがった環境があり、日本人には日本人の特有な目があるのであるからもし日本の映画製作者がほんとうの日本人としての自分自身の目を開いてわれわれの環境を物色したら、西洋人には到底考えつかないやうな新しいアイデイアがいくらも浮かびさうなものだと思はれるが

アウトライン　『英 outline』　輪郭。あらすじ。またテニスコートの外側の線。

◇生方敏郎「自分を他に尊くする事と自分を自分に尊くする事と」（昭和三）それからまた第二に自分をかくす方法として、中学程度の自然科学の書物や哲学心理学倫理学等のアウトラインを書いた軽便なハンドブックの中から、彼方此方（あちこち）ぬき書きをして来てならべる事、

◇岡本一平『富士は三角』五〇（昭和五）花世は下を向いたが、一寸会心の笑みに頬の外線（アウトライン）がゆるむ。

あおじゃしん　【青写真】　鉄塩の感光性を利用した写真。一八四二年、イギリスのハーシェルが発明した。設計・工作図面の複写に用いるところから、将来の計画や抱負にもいう。

◇『新しい言葉の泉』（昭和三）青写真　青地に白色、或は白地に青色の線をあらはす写真。

［参考］　◇石坂洋次郎『あじさいの歌』新しい出発（昭和三三～三四）源十郎が、いよいよ家の大改築をやる考えになり、室内装飾を引き受けた藤助と、彼の友人の木本という建築家が、下絵や青写真をもって訪ねて来て、源十郎といろいろな打ち合せをしていたからだった。

あおたがい　【青田買い】　水稲の収穫以前にあらかじめ収穫量をきめて買入の契約をすること。転じて、会社などが卒業見込みの学生を卒業前に採用と決めること。青田刈りともいう。

◇『新しい言葉の泉』（昭和三）青田買ひ　見越し買ひの一種、即ち穀物の収穫以前に予め其の収穫高を定めて買約をなすこと。

あかげっと　【赤毛布】　明治初年ごろからはやった赤い毛布のマント。また、それを身につけて東京見物にきた

お上りさんのこと。なお、赤い毛氈のことをもいう。
◇福田英子『妾の半生涯』第四（明治三七）アゝ其処に我が同志の赤毛布を纏ひつゝ、同じく散歩するが見えたり。
◇朴念仁『へなぶり』（明治三八）赤毛布の気燄　あんだツて田舎者だと馬鹿こくな　おいらが無けりや干ぼしだんべえ
◇坪谷水哉「明治百年東京繁昌記」『冒険世界』（明治四三・四・二〇号）東京見物の赤毛布といふ者は今明治百年になつても、矢張り昔と異らず、見物人は、始めて東京へ出て来て、何を見ても驚いて居るが、
◇葉山嘉樹『海に生くる人々』二六（大正一五）とも、おもてのサンパンも、赤毛布で作られた厚司を着た、囚人のやうな船頭さんによつて、漕ぎつけられた。
◇岡本一平「今の東海道五十三次一（昭和四）化猫でも出さうな陰気な奥座敷、色変りした赤毛布の上に蛇身鳥の牙と称するもの、孕女を斬つたと称する刀、権現様の遺つたと称する椀なぞが並べられてる。
◇山本笑月『明治世相百話』赤毛布の正体（昭和一一）辻車の腰掛、茶店の床几、芝居の桟敷、そのほかお花見や遊山の席など明治初年の赤毛布の流行は大したもの、毛布といへば赤いものと心得るぐらゐ。この時代に地方人の東京見物、たいてい赤毛布を被つてゐたので、たうとう田舎者の代名詞となつたが、
［参考］◇池田弥三郎『銀座十二章』四の章（昭和四〇）天笱居といっては誰もあまり知るまいが、天金といったら、東京の名物の一つとしてお上りさんの赤ゲットにも知られている旗亭の主人である。

あかじ【赤字】帳簿に不足額を赤インクで記入するところから支出が収入より多いこと。黒字に対する語。また、印刷屋の通語で校正刷のこと。
◇『新しい言葉の泉』（昭和三）赤字　校正刷のこと、校正は赤字でするから単に赤字と呼んで校正刷を意味することゝなつた。印刷屋の通語。
◇小林秀雄「新人Xへ」（昭和一〇）ジャアナリズムはこれ以上純文学の赤字に堪へられるか、
◇谷崎潤一郎「私の貧乏物語」『中央公論』（昭和一〇・一号）その時代に一旦膨張した生活費をその後徐々に切り縮めることが困難なところから、斯くの如く始終赤字に悩むのでもあるが、

あかしんぶん【赤新聞】暴露記事やセックス記事を売り物にする新聞。明治の大衆日刊紙『万朝報』（明治二五年創刊、昭和一五年東京毎夕新聞に合併）が淡紅色の用紙を用いたことからいう。
◇内田魯庵『社会百面相』精神家・上（明治三五）我輩の

許へ頼つたのは赤新聞に墮落書生の標本として書立てられる稽古をする為ちやあるまい、

◇大宅壮一『青春日記』（大正四・八・一四）九時頃帰宅して赤新聞を見ると大阪人の一年の煙草代で軍艦が一隻買え、日本人一年にのむ口附煙草をつなぎ合せると地球を二周する事が出来るそうだ。

◇生方敏郎『明治大正見聞史』明治時代の学生生活・七（大正一五）万朝報はまだ赤新聞だつた。

あかバイ　【赤バイ】警視庁の赤く塗ったオートバイ。昭和一一年、赤バイを白バイと改称。

◇『新らしい言葉の字引』訂正増補（大正一〇）赤バイ　赤いオートバイの意味。警視庁の大臣警護、その他追跡用のオート・バイ。赤く塗られてゐる処から此の称がある。

あかもん　【赤門】旧大名前田侯爵邸の正門。朱塗になっているので赤門と呼ばれた。後に東京帝国大学の通用門となったので、東京帝国大学及び大学関係者をさしていう。

◇小栗風葉『青春』春之巻・五（明治三八～三九）大学構内の椿山の下まで来懸つた時、丁度赤門を入つて向ふから帰つて来たのが欽哉であつた。

◇日本新聞社編『狂画一トロ噺』（明治四三）甲『オイ〳〵、須田町で新聞を売つてるの中に赤門出の文学士が居るつてね……　乙『そうさ、夫れが詰り、大学出が矢張何か知ら役に立つと云ふ好い証拠さ

◇田山花袋『東京の三十年』新しき思想の芽（大正六）上田敏氏は（中略）兎に角樗牛と相対して赤門の二大秀才であつた。

◇寺田寅彦「破片」（昭和九）あるバスの女車掌は大学赤門前で、「ダイガクセキモンマへ」と叫んでゐたさうである。

あきす　【空巣】〔空巣ねらいの略語〕留守の家にはいるどろぼう。もと盗賊仲間の隠語で、「あき」とも略す。

◇柳家小さん口演・吉田欽一速記「閉込み」『百花園』十九巻百八十六号（明治三〇・一・二〇）出た留守を狙って這入ります、俗に明巣狙と賊の方で申します。

◇岡本一平『どぜう地獄』一三（大正一三）運よくバ艦隊が対馬水道を通り図星に嵌つて来たからこそよけれ若し他方の道より空巣覘ひをやり西海岸を脅威せば日本は大変ではないかと。

◇生方敏郎『福太郎と幸兵衛との対話』第二会（昭和三）君のやうな肉弾係が有るからこそ、欧洲の大戦だ、シベリヤの空巣狙ひだ、といつて、用も無いところへ繰り出してはその度毎に軍隊を惜しげもなく殺す。

◇『かくし言葉の字引』（昭和四）あきす　空巣　白昼に

人の不在に乘じて屋内に忍び入り金品を盗み取る奴をいふ。あき又はあきすねらひともいふ。

アクセント　『英 accent』　発音の調子。音の抑揚。語調。音を強めて発音すること。強調。

◇国木田独歩『源おぢ』（明治三〇）　食ふ時傍より甘きやと問へばアクセント無き言葉にて甘しと答ふ其声は地の底にて響くが如し。

◇夏目漱石『彼岸過迄』停留所・五（明治四五）　其所へ長唄の好だとかいふ御母さんが時々出て来て、滑つこい癖にアクセントの強い言葉で、舌触の好い愛嬌を振り懸けてくれる折などは、

◇有島武郎『或る女』前編・七（大正八）　耳には子供のアクセントが焼き付いた。

◇石坂洋次郎『若い人』下・九（昭和八～一二）　間崎は不自然な強いアクセントで鸚鵡返しに答へた。

◇高見順『如何なる星の下に』第二回（昭和一四～一五）　この「お姉さん」といふのは、ねに強いアクセントを置き、さんは「さん」と「すん」の間の音で、言葉では現はし得ない微妙な甘さである。

あくとくしんぶん　【悪徳新聞】　無根の事件を捏造して読者の好奇心を煽ったり、他人の秘密をあばいたりして、脅迫がましいことをする新聞。黄色新聞（Yellow-Press の訳語）、黄紙ともいう。そうする人を悪徳記者という。

◇内田魯庵『破垣』二（明治三四）　名士の剔抜を専門とする新聞で二三度叩かれた事はあるが例の悪徳新聞かと誰しも新聞の方を嘘にして了った。

◇『新公論』（明治四〇・一〇号）　戦争々々の声は黄紙（米国悪徳新聞）の捏造に過ぎない。

◇木香生「東京の大道商人と其の商品」『財政経済時報』（大正九・一号）　然し彼等は悪徳記者がいふ「新聞記者と乞食は三日すれば忘られない」といふ自堕落な連中の部類に属する者で、

アクロバット　『英 acrobat』　曲芸。かるわざ。またその技をする芸人。世渡りの上手な人。

◇『モダン用語辞典』（昭和五）　アクロバット　Acrobat　英　ギリシヤ語のアクロバット（爪先で歩くこと）から来たので綱渡りの意。処がこれを転用されて、軽業師をかう呼んでゐる。「あの男は中々のアクロバットだ」と云へば、中々世渡りの上手な男だ――との意味である。政治上、理論上の変節者のことも云ふ。

◇田中英光『オリンポスの果実』六（昭和一五）　と、上の甲板からは、ダイビングの女子選手が、胴のまはりを、吊鐶で押へたまま、空中に、さッと飛びこむ。アクロバットなどより真面目な美しさです。

アジ　『英 agitation の略語』煽動、煽動するの意の労働運動の用語。アジはアジテーションより一般的である。アジを動詞化して「アジる」という。また、「アジ的」「アジプロ文学」「アジ文書」などの派生語がある。
◇徳永直『太陽のない街』対峙する陣営・3（昭和三〜四）ロ、無産者芸術聯盟（トランク）劇場に依頼してアジ的な演劇を各班に巡演してもらふこと、
◇『大阪朝日新聞』流行語欄（昭和六・九・一）　アジる—英語のアジテートを日本語化した動詞。煽動すること。本来は大衆の不満、要求を鼓舞して、ある団体行動に移す意味の社会運動用語で「工場でアジれ！」「農民にアジを持ちこむ」などいふ。名詞はアジテエーション、略してアジ。転用して「彼奴近ごろ悄げてゐるから元気をつけてやれ！」或は「おだてゝオゴらせろ！」といふ場合に「彼奴をアジってやれ」。

アジテーター　『英 agitator』煽動家。
◇徳永直『太陽のない街』戦線・1（昭和三〜四）彼女は、百パーセントのアジテーターであった。聴衆の心臓を掴むことより巧妙であった。
［参考］◇池島信平『雑誌記者』狩り立てられた編集者（昭和三三）おそらく、平凡で堅実な中産知識階級の人たちも、職業的アジテーターのふる旗に、素直についてゆけないものを感じたのではなかろうか。
◇石坂洋次郎『あじさいの歌』赤い鶏頭（昭和三三〜三四）「すぐ慣れますよ、けい子さん。……そうすることによって、貴女の皮膚は日光や外気にさらされ、血の循環がよくなり、そうして、貴女の美しさはもっと現実的なものになりますよ……」「アジテーター（煽動者）として申し分ないわ。私、自分の服装のデザインを河田さんにやっていただいたこともあるんですが、ちょっと不必要に肌を露出させすぎる傾向もあるようなんですよ。ふふ」

アジト　『英 agitating-point または agitate-point の略語』移動秘密指令部。転じて、秘密集会所。
◇『大阪朝日新聞』流行語欄（昭和六・九・一）　アジト—社会運動家がアジテエーションの便宜のためにトした集合所、合宿。今は主として官憲の眼を避ける「秘密本部」の意に用ひる。「近ごろ姿を見せないが新しいアジトでも見つけたのかい？」などの俗用では「堕家」「妾宅」の意。
◇小林多喜二『党生活者』一（昭和八）私達は自分のアヂト附近での連絡でなかったら、九時半過ぎには一切の用事をしないことにしてゐる。
◇石坂洋次郎『麦死なず』（昭和一一）鉄の闘士、同志、アヂト、ハウスキーパー、カムパニヤ、三・一五、オレ達、饑餓同盟、階級恋愛、史的唯物論。…新しい生活を暗示す

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo